

# 名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅳ

—— 第13次調査 ——

2023

令和5年3月

平泉町教育委員会

# 名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅳ

—— 第13次調査 ——

2023

令和5年3月

平泉町教育委員会





調査区全景（南から）



13-1 調査区（南から）





13-2 調査区（南から）



13-3 調査区（南から）



# 序

平泉町内には、特別史跡中尊寺境内・毛越寺境内附鎮守社跡・無量光院跡、史跡柳之御所・平泉遺跡群、達谷窟、金鶏山、特別名勝毛越寺庭園、名勝旧観自在王院庭園・おくのほそ道の風景地など奥州藤原氏に関連する数多くの国指定文化財が狭い町域に分布しています。

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』文治五年（1189）九月十七日条の「寺塔已下注文」に、観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安倍宗任の娘）が建立したと、小阿弥陀堂も基衡の妻が建立したことが記されています。

観自在王院跡は、昭和27年に国の特別史跡毛越寺跡附鎮守社跡の一部として指定されました。昭和29～31年に平泉遺跡調査会によって行われた調査によって、園池の北側から大阿弥陀堂及び小阿弥陀堂の痕跡を示す礎石が発見されたほか、園池の南側では棟門跡が確認されています。平成17年には旧観自在王院庭園として名勝に指定されています。

当町では、遺跡の重要性に鑑み昭和47～53年度にかけて地元の方々のご理解とご協力を得ながら史跡整備を進め、史跡の恒久的な保存措置を図りましたが、昭和の整備完了から約40年が経過し、平成27・28年度に史跡南西側の公有化を実施したことを契機に、平成30年度より再整備を視野に入れた内容確認調査を開始しました。

本報告書は令和3年度に実施しました第13次調査成果を収録したものです。本次調査では、昭和52年の調査で確認された車宿の遺構を調査し、遺構の位置を再測量するとともに、柱の樹種がクリであることが確認されています。

観自在王院跡保存修理事業につきましては、地域住民の方々をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました文化庁・岩手県教育委員会・平泉遺跡群調査整備指導委員会・宗教法人毛越寺に対し深く感謝申し上げます。

令和5年3月

平泉町教育委員会

教育長 吉野新平

# 例 言

- 1 本書は令和3年度に国庫補助事業より実施した名勝旧観自在王院庭園第13次調査の報告である。
- 2 野外調査期間は令和3年9月2日から令和3年11月18日までである。室内整理期間は令和4年3月31日までである。
- 3 調査地点は岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山地内である。調査面積は約125㎡である。
- 4 発掘調査の主体は平泉町教育委員会である。

## (1) 令和3年度

平泉町教育委員会

教 育 長 岩 淵 実 (～令和3年9月30日)  
吉 野 新 平 (令和3年10月1日～)

平泉文化遺産センター

館 長 千 葉 登 主 事 鈴 木 理 世  
館 長 補 佐 島 原 弘 征 主 任 荻 山 義 浩  
主任主査文化財調査員 菅 原 計 二 補助員 (臨時) 二階堂 里 絵  
主任主査文化財調査員 鈴 木 江 利 子 補助員 (臨時) 佐 藤 昌 弘  
文 化 財 調 査 員 鈴 木 博 之 補助員 (臨時) 熊 谷 明 美  
主 任 佐 々 木 成 淳 補助員 (臨時) 菊 地 道 子

## (2) 令和4年度

平泉町教育委員会

教 育 長 吉 野 新 平

平泉文化遺産センター

館 長 高 橋 国 博 主 任 千 葉 徹  
館 長 補 佐 島 原 弘 征 主任文化財調査員 菅 原 計 二  
主任主査文化財調査員 鈴 木 江 利 子 補助員 (臨時) 二階堂 里 絵  
文 化 財 調 査 員 鈴 木 博 之 補助員 (臨時) 佐 藤 昌 弘  
主 任 佐 々 木 成 淳 補助員 (臨時) 熊 谷 明 美  
主 任 鈴 木 理 世 補助員 (臨時) 菊 地 道 子

- 5 発掘調査・室内整理は鈴木江利子・島原弘征が担当し、菊地の協力を得た。事務は佐々木が担当した。
- 6 本書の執筆は、鈴木江利子・島原が担当した。
- 7 調査の基準点は平成30年に観自在王院跡に設置した基準点（平面直角座標X系に準拠）をもとに調査員が打設した。
- 8 土層観察の土色は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄 2001）によった。
- 9 調査成果の一部については、平泉遺跡群調査整備指導委員会、平泉町HP等で公表している。上記と内容が異なる場合は本書を優先する。
- 10 発掘調査及び室内整理にあたっては、次の方々ならびに機関からご指導とご協力を賜った（順不同・敬称略）  
宗教法人毛越寺、文化庁、岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備指導委員会、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 11 出土遺物及び写真・図面等の調査に関わる資料は平泉町教育委員会が保管している。
- 12 発掘調査参加者（順不同・敬称略）  
阿部俊春、石川巖覺、石川誠、及川勝、小松代方代、佐々木利雄、佐々木敏治、佐々木直久、佐藤歌奈子、佐藤彦悦、菅原久美子、菅原まつ子、菅原有利、束稲正博、千條あえ子、千葉勝也、千葉京子、千葉セツ子、千葉晃久、千葉ナカ子、千葉政志、千葉正行、橋階義彦、丸山聡子、吉田琴子

# 目 次

I 位置と環境	1	III 調査の成果	6
1 観自在王院跡の位置	1	1 検出遺構	6
2 観自在王院跡の現状	1	2 調査概要	6
II 調査の概要	3	3 出土遺物	16
1 調査目的	3	IV まとめ	17
2 調査方法	4		

# 表 目 次

第1表 観自在王院跡調査履歴	3	第3表 国産陶器観察表	17
第2表 かわらけ観察表	17		

# 図 版

第1図 平泉町の位置	1	第7図 13-2調査区断面図(2)	13
第2図 観自在王院跡第13次調査位置図	2	第8図 13-3調査区平面図	14
第3図 観自在王院跡第13次調査全体図	5	第9図 13-3調査区断面図(1)	15
第4図 8次・13次調査遺構配置図	7	第10図 13-3調査区断面図(2)	16
第5図 13-1調査区平面図・断面図	9	第11図 出土遺物	17
第6図 13-2調査区平面図・断面図(1)	12		

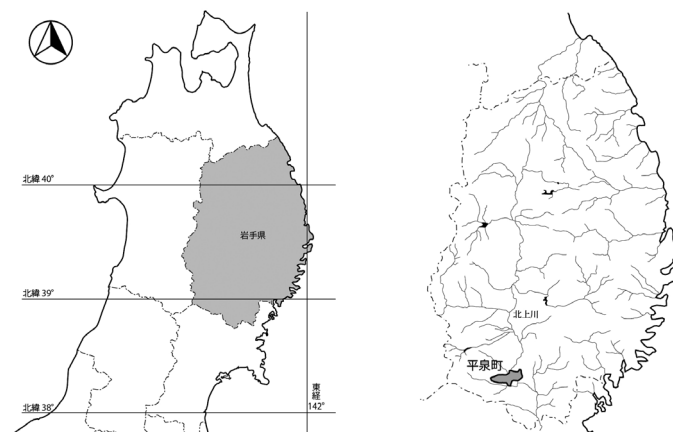
# 写 真 図 版

写真図版1	20	写真図版4 車宿柱根	23
写真図版2 13-1調査区	21	写真図版5 13-3調査区	24
写真図版3 13-2調査区	22		

# I 位置と環境

## 1 観自在王院跡の位置

平泉町は、岩手県の南部に所在する人口約7,000人、面積約64平方kmの小さな町である。東側は東稲山（595.7m）、音羽山（539m）、観音山（325.2m）が連なる北上山地、西側は奥羽山脈に続く標高100～200m前後の丘陵地に囲まれ、中央部には北上川が南流し、その両側に田園地帯が広がっている。南側を一関市、北側を奥州市に接している。平泉は、12世紀に奥州藤原氏の拠点として栄えたが、源頼朝によって1189年



第1図 平泉町の位置

に滅亡する。その繁栄と滅亡の歴史は、多くの詩歌を喚起する素材となり、1689年平泉を訪れた俳人の松尾芭蕉をはじめ、多くの文人たちを惹きつけ、往時を偲ばせている。平成23年には町内に所在する5つの史跡名勝が「平泉—浄土を表す建築庭園及び考古学的遺跡群—」として世界遺産登録され、旧観自在王院庭園その構成資産の一つとなっている。

## 2 観自在王院跡の現状

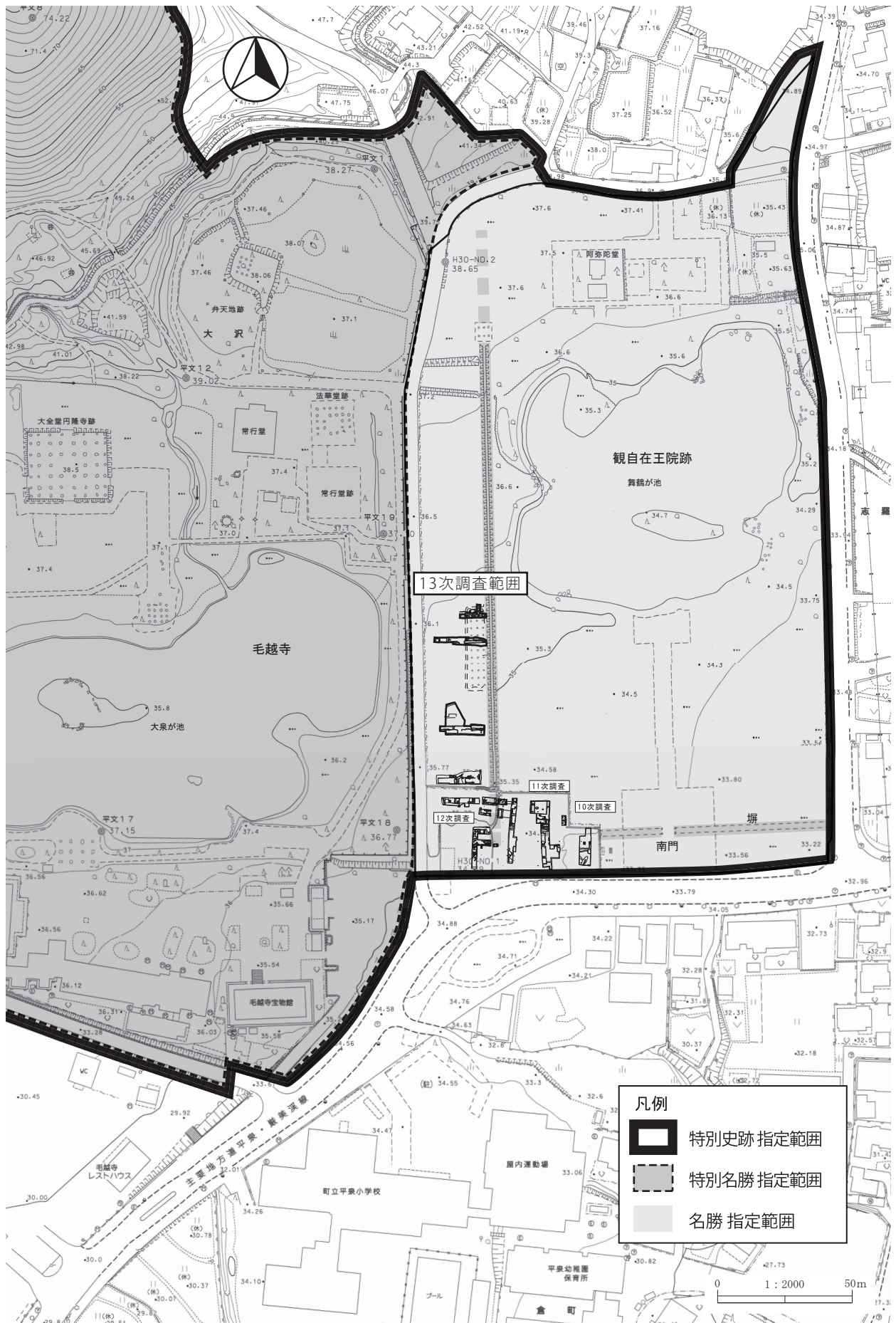
観自在王院跡は毛越寺の東隣に位置する。『吾妻鏡』には観自在王院（阿弥陀堂と称する）は基衡の妻（安倍宗任の娘）が建立したこと、小阿弥陀堂も基衡の妻が建立したことが記されている。境内の大きさは南北250m、東西120mを測り、敷地の北側に大阿弥陀堂・小阿弥陀堂などの主要堂宇が建ち、その南側には中島を擁する舞鶴が池と呼ばれる大きな園池が位置する。

昭和29～31年に平泉遺跡調査会によって行われた1～3次調査によって、園池の北側から大阿弥陀堂及び小阿弥陀堂の痕跡を示す礎石が発見されたほか、園池の南側では棟門跡が確認された。昭和47～52年には史跡整備に伴う内容確認調査（4～8次）が行われ、新たに西門跡、導水路、牛車を取りめる車宿が見つかった。導水は池西側にある滝石組から供給されているが、滝石組に接続する導水路は西側土塁付近を暗渠でくぐり、毛越寺裏にある弁天池を取水源にしていることが確認された。なお、暗渠に用いられた材木はクリ材であった（調査履歴は第1表参照）。

前述の平泉遺跡調査会による調査の後、平泉町は「平泉町文化財保護基本計画」を策定し、「観自在王院跡保存整備計画」に基づき観自在王院の復元的整備を実施することとした。計画は①土地の公有化と整備、②文化財の管理保護、に重点を置いたもので、文化財に対する国民の親しみと理解を深めることがねらいであった。土地の公有化は昭和42～50年度まで行い、整備事業は一部公有化と同時進行となるが、昭和49～53年度に実施している（平泉町1979）。

その後、平成17年に名勝旧観自在王院庭園として指定され、昭和27年の特別史跡指定と併せて、史跡・名勝の二重指定を受けた。平成27・28年には昭和整備の際に公有化できなかった史跡南西側の公有化を実施した。整備完了から40年が経過し老朽化等の課題もあったことから、史跡南西側の整備に併せて、再整備事業を開始することになり、平成30年度より整備に必要な情報を取得するための内容確認調査を開始した。





第2図 観自在王院跡第13次調査位置図

第1表 観自在王院跡調査履歴

回数	主体	原因	期間	面積㎡	内容
1	平泉遺跡調査会	内容確認	S291011～1110		・伝大阿弥陀堂跡、伝小阿弥陀堂跡、中間地区、伝鐘楼跡、伝普賢堂跡、中島、池跡（瀧石組、東北岸）の調査。
2	平泉遺跡調査会	内容確認	S301005～1109		・伝大阿弥陀堂跡、伝小阿弥陀堂跡、中間地区、南門跡、池跡（東北岸）の調査。
3	平泉遺跡調査会	内容確認	S311009～1125		・伝大小阿弥陀堂北側を調査したが、遺構は確認されず。
4	平泉町教育委員会	復元整備	S471023～480323	400	・池導水路及び中島規模の確認を目的とした調査で、導水路は瀧石組から西側土塁下を暗渠でくぐり毛越寺方向に延びていることを確認した（整備事業1次調査）。
5	平泉町教育委員会	復元整備	S481014～1122	454	・北西岬平坦地の遺構の有無、西側土塁の追跡、中島東岸と普賢堂の調査を実施（整備事業2次調査）。
6	平泉町教育委員会	復元整備	S500728～1105	341	・大阿弥陀堂跡南側と南門の調査を実施。前者は遺構が確認されず。後者は池南岸から約80m南で径36cm程の柱2本で構成された門を確認。双方の柱の間隔は4.5mを測る。また、貝形柱の可能性のある15cm角の柱を確認した（整備事業3次調査）。
7	平泉町教育委員会	復元整備	S510913～1014	414	・北西部を対象に調査を実施し、西門跡を確認。桁行1間（4.8m）、梁間2間（3.6m）の四脚門で、主柱は掘立柱、袖柱は礎石で構成されることを確認（整備事業4次調査）。
8	平泉町教育委員会	復元整備	S521011～1203	1,410	・西門跡と大阿弥陀堂跡との間及び池跡南側と西側土塁脇を対象に調査を実施。前者は遺構が確認されず、後者からは桁行10間（27.5m）、梁間2間（4.6m）の掘立柱建物を確認。四周に雨落溝が廻る。『吾妻鏡』に記載のある車宿の遺構と確認（整備事業5次調査）。
9	平泉町教育委員会	水道更新、道路整備	H070127～0228、0821～1020	180	・町道舞鶴池線の舗装、水道工事に先立つ発掘調査。 ・近世末～近代にかけての瓦窯跡1基と瓦と窯道具の廃棄土坑1基、陶器窯道具が出土した近代以降の溝跡3条が確認された。
10	平泉町教育委員会	内容確認	H301029～1203	185	・観自在王院跡の南側を区画する堀跡や造営時の整地層とともに、堀跡南から、毛越寺及び観自在王院跡の南に隣接する東西大路の北側の側溝を検出したが、堀と若干方向が異なっていた。
11	平泉町教育委員会	内容確認	R11031～1209	125	・観自在王院跡の西側を区画する土塁跡を確認したが、南西隅付近は攪乱が著しく区画施設は失われていた。 ・西側の区画施設は版築とはいえない難い盛土で構成されており、築地堀というよりは土塁に近いと考えられる。
12	平泉町教育委員会	内容確認	R21120～R30325	125	・観自在王院南西側を対象の調査を行い、溝2条、南北方向の石敷、根石の可能性のある集石、柱穴を確認した。12SD2は11次調査で確認した11SD2の続きと考えられる。石敷はSD2と重なるものの溝が途切れていることから、通路と考えられる。
13	平泉町教育委員会	内容確認	R30902～1118	170	・車宿、溝跡、南北方向の石敷、柱穴を確認した。車宿は昭和52年の調査で確認されており、北から5番目の柱（S68.1ライン）の再調査を行い、柱の状況を確認した。車宿の柱は径30cmと太く、残存状況は良好で柱の通りも良いことを確認した。なお、柱の樹種は、自然科学分析の結果クリと同定された。

参考文献

藤島亥治郎 1961 『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』（1～3次）  
 平泉町 1979 『観自在王院跡整備報告書』（4～8次）  
 平泉町教育委員会 2020 『名勝旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅰ』岩手県平泉町文化財調査報告書第135集(10次)  
 平泉町教育委員会 2021 『名勝旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅱ』岩手県平泉町文化財調査報告書第139集(11次)  
 平泉町教育委員会 2022 『名勝旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅲ』岩手県平泉町文化財調査報告書第142集(12次)

## Ⅱ 調査の概要

### 1 調査目的

将来的な史跡南西側整備を目指した内容確認調査で、今年度が3年目にあたる。観自在王院跡はこれまで、平泉遺跡調査会・平泉町教育委員会によって今回の調査を含め13回の調査が行われてきている。13次調査は、観自在王院跡南西側を対象に調査を行った。

なお、観自在王院跡整備報告書において整備事業における第1～5次の発掘調査報告がされて



いるが、昭和 29～31 年度に実施された平泉遺跡調査会の発掘調査が先行して行われていることから、遺跡調査会の調査を 1～3 次とし、整備事業の調査を 4～8 次調査とした。

## 2 調査方法

**グリッド** 今回の再調査に併せて観自在王院跡の周辺に基準点を打設し、遺構実測や遺物出土地点の記録等の実測作業の基準とした。

なお、平成 20 年 6 月 14 日に発生した岩手・宮城内陸地震において、調査区周辺では西北西方向に約 20cm、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北太平洋沖地震によって、南南東へ約 2.7 m ずれていることが確認された。よって、今回の基準点の数値は、周辺の調査成果との整合ができるよう変動前の数値（測地成果 2000）に変換した測量成果を使用している。

**粗掘・検出** 遺構検出面まではスコップもしくは移植ベラで掘削し、遺構や層位の確認を進め、鋤簾等で遺構検出作業を行った。ただし、昭和の整備で施された玉石敷や盛土は重機によって剥いでいる。

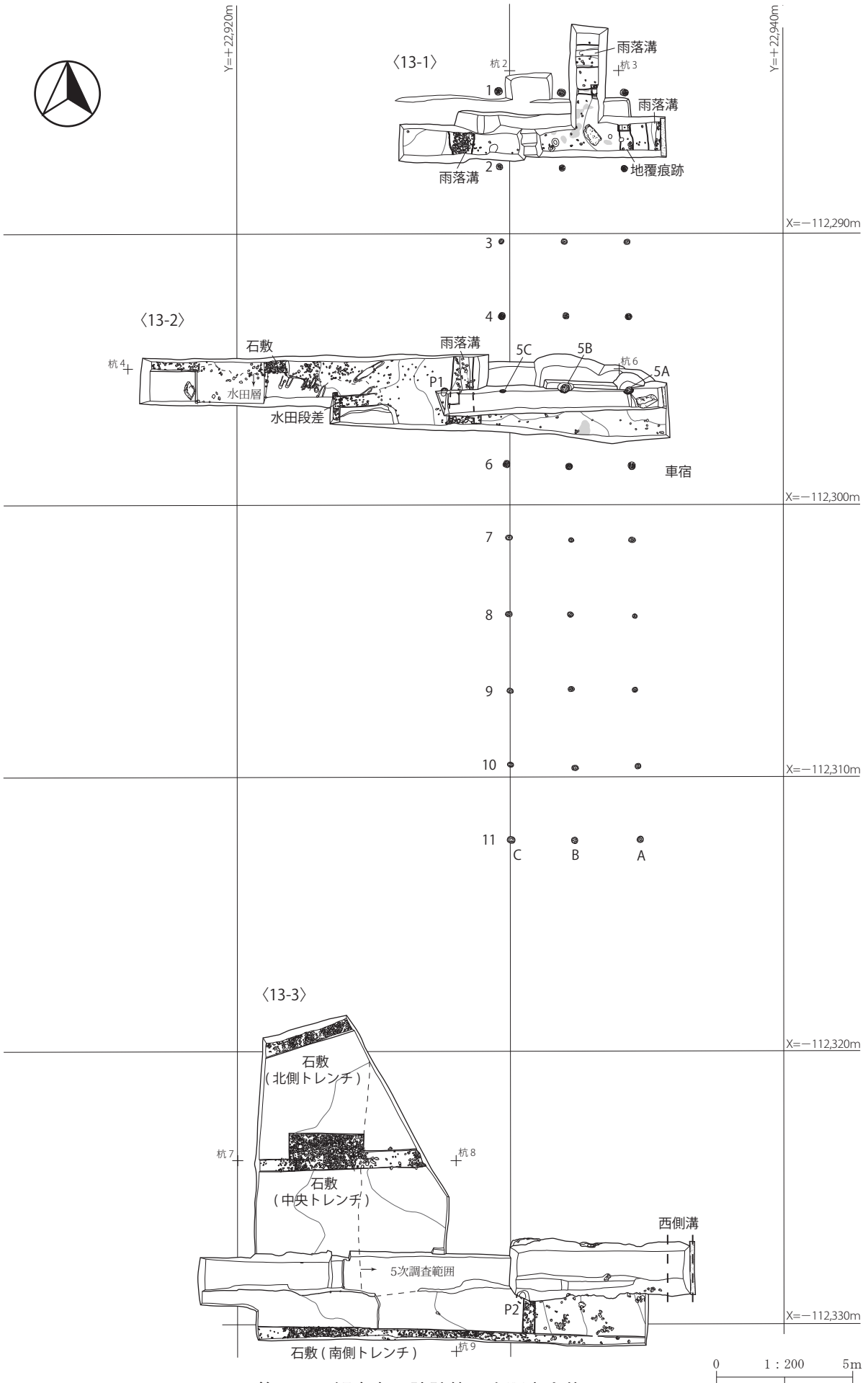
**精査** 基本的には検出に留めた。ただし、遺構の年代・層序等を確認するため溝は部分的にサブトレンチを入れ、車宿の柱痕は 8 次調査のサブトレンチを利用して断面観察を行った。柱穴は半裁までに留め調査を行った。

**遺構名** 複数次にまたがる遺構があることから、12 次調査 1 号溝であれば 12SD1 のように遺構略号の前に次数を表記し判別できることを原則としたが、8 次調査において「車宿」、「西側溝」の遺構名で調査されたものについては、8 次調査の表記を踏襲している。

**記録** 遺構の実測は、平板測量もしくはグリッドを 1×1 m に分割したメッシュを用いて測量した。遺構写真は 35mm 版カメラとデジタルカメラ（ニコン D 90）をメインカメラとし、遺構及び調査全景写真時には、メインカメラに加えて 6×7 版カメラ（リバーサル）で撮影を行った。

**埋め戻し** 山砂で遺構面を覆い、その上に調査で掘削した土を埋めた。

**普及活動** 現場は随時公開し調査に支障がない範疇で説明等を行い、調査終盤の令和 3 年 11 月 7 日に現地説明会を開催した。調査成果は、「広報ひらいずみ」等で公表している。



## Ⅲ 調査の成果

### 1 検出遺構

石敷、車宿（柱根・雨落溝・地覆痕跡）、柱穴、整地、土塁西側溝等を検出した。

車宿について『観自在王院跡整備報告書』（平泉町 昭和 54 年）では、南北方向の「桁行 10 間、各柱間 2.75 m（9 尺）等間、梁間 2 間、各 2.3 m（7.5 尺）の掘立柱の建物であった。33 本すべての柱根が残存し（中略）東および南北両妻の柱間には地覆石を並べていたらしく（中略）この建物は西側の全面を開き、他の 3 方は壁に囲まれていたと推定される。」とある。また雨落溝や石敷の道路遺構についても報告されている。13 次調査では、位置がほとんど重複している事もあり、報告書の本文と図面に記載されている遺構名を用いた。13 次調査図に 8 次の調査図を重ね、遺構の位置関係を示した（第 4 図 8 次・13 次調査遺構配置図）。

### 2 調査概要

調査対象は南北 25m、東西 9 m の範囲で、車宿北側に合わせて東西方向に長い 13-1・13-2 調査区を設定した。車宿に係する遺構と石敷などを検出した。車宿の柱及び掘方は、8 次調査の図面を元に西側を正面として、北を 1 列目、順番に南に向かい南辺が 11 列目となっている。東から西に向かい A B C の順とし、個々には一番北側は東から西に向かって 1 A ・ 1 B ・ 1 C としている。13-2 調査区では 5 A ・ 5 B ・ 5 C の調査を行っている。13-2 調査区中央から西の南側では水田層が残り、昭和の調査が行われていない範囲であることが分かる。車宿から 7 m 南に設けた 13-3 調査区は、東西方向に長い範囲と北側に台形型を加えた形をしている。西側は保護砂が施されていない箇所、8 次調査区外となっている。現在の整備面からは浅く、検出した石敷直上まで水田層であったことから削平されている箇所もある。南側トレンチの北側は、8 次調査図面に記載はないが、明らかに掘削した痕跡を示す。調査箇所よりも西側に続いており、整備の際に設けたトレンチと考えられる。

#### 13-1 調査区

車宿の柱痕跡 1 列目と 2 列目の間と、北辺の 1 A と 1 B の間を調査した。距離は東西 10m、幅は 1.5m で、北側には 2.5m 程である。深さは現表土の石敷上から 80～90cm で、この深さまで 8 次調査が行われている。埋戻し層ではあるが、後の掘り込み痕跡も認められ、おそらく整備の際に柱を設置するため再度掘削した跡と思われる。断面では 1 層が柱の設置時と思われ礫を多く含んでいる。2 ・ 3 層は調査後に埋め戻した粘土のブロック層である。遺構検出標高は 34.96～35.24m で西から東に緩く低くなっている。遺構検出面は観自在王院造営の整地であり、8 次調査の検出面である。

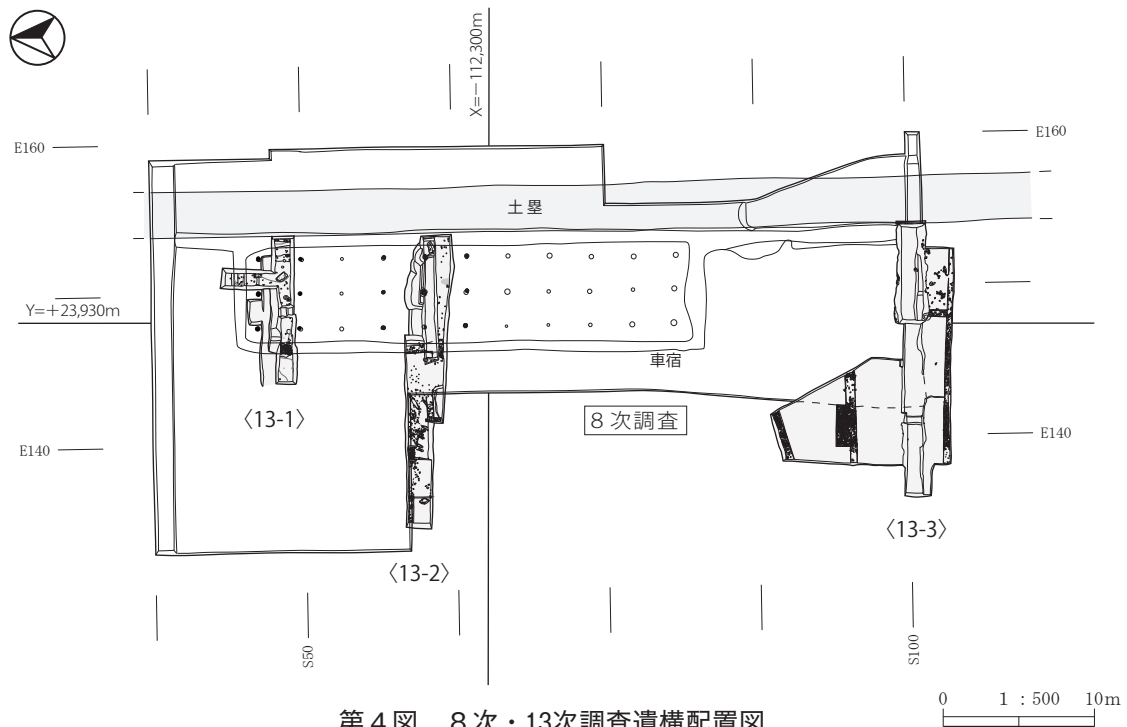
検出遺構は車宿を囲む雨落溝の跡と、柱筋北と東側には地覆痕跡と思われる変色部分が認められた。昭和の調査報告には「柱間には地覆石を並べていたらしく（中略）圧痕が明らかに認められた。」とある。このことから、遺構名は地覆痕跡とした。

#### 13-2 調査区

車宿の柱表示 5 列目を中心に東西方向に長く調査区を設定した。東端は観自在王院西側土塁裾からで、西側は毛越寺側の道路まで 4.5m の距離にある。長さは 9.7m、幅は 0.9～1.5m である。遺構検出標高は東側で 34.9～35.0m、西側は 35.2～35.35m である。遺構面までの深さは 60～80cm で、西から東側に緩く低くなっている。柱根検出位置も 8 次調査で開けたトレンチ箇所、再度調査をした。車宿の柱根 3 箇所、柱穴 1 個、雨落溝、石敷、整地層を検出した。中央に検出した水田段差の箇所は 8 次調査では調査を行っていない。周辺より 20cm 程度下がっている状況から、一段下がった水田であると思われる。石を多く含むが浮いている状態である。

#### 13-3 調査区

8 次調査では車宿から南に範囲を広く設定している。13-3 調査区は 8 次調査区の南側にあり、



第4図 8次・13次調査遺構配置図

東側や深掘り箇所にも重なりを持つように調査区を設定した。範囲は東西18m、南北12mで、西側及び南端は8次調査の行われなかった箇所である。現状から遺構面までの深さは、整備で敷いた石も含んで20～50cm程度で、遺構保護層は13-1調査区など北側に比べ薄い状態である。水田層が遺構面に迫り削平を受けた箇所もある。遺構検出標高は34.9～35.35mで東側に下がっている。南側深掘り箇所では柱穴や溝跡、不明掘り込み、整地層、石敷を確認した。西側の平場は今回初めて調査しており、北側から中央、南側の3か所にトレンチを設定し、石敷を検出した。

### (1) 車宿の柱根・柱穴

13-2で、5A・5B・5Cの掘方と柱根、柱穴(P1)を検出している。掘方は1mを超えて、深さも同等である。以下の表は検出断面を元にしていて、柱の場合は中心まで検出していない側面では、実際よりも細い記載となっている。腐った様子はなく、材料を削りだした痕が5Aと5Bには見える。5Cは丸みを持ち、削り痕が目立たない。5B断面の正面には幅12cmの面取りが上から下まで長く施され脇にも削り痕が観察できる。柱の底を一部脇から掘削してみたが、砂を含む土が硬くしまっていて、なかなか掘ることは難しかった。

P1は東西に並ぶ5Aから5Cの西延長上に検出した。5Cからの距離は2.2mである。部分的な調査で子細は不明である。車宿の足場の可能性や、間に雨落溝を介さなければ底などが考えられるが、一か所であり判断できない。

P2は13-3南中央に検出している。8次トレンチを掘削して壁面に現れている。石敷の石が多く含まれる層の下から掘り込まれている。ただし周辺の石は水田により混ぜられている様子も見受けられる。

遺構名	掘方			柱痕跡 径(cm)	柱根		
	掘方径(cm)	深さ(cm)	底面標高(m)		長さ(cm)	幅(cm)	底標高(m)
5A	110	120	33.65	—	103	36	33.72
5B	100	115	33.69	—	90	34	33.75
5C	108	105	33.88	—	77	20	33.97
P1	22	[19]	34.75以下	14	—	—	—
P2	50	56	34.48	20	—	—	—

## (2) 雨落溝・西側溝

13-1では雨落溝は車宿西辺と北辺、東辺を検出した。現在の車宿の柱表示から溝の中心まで1.3～1.35mの位置にある。西辺の雨落溝は南北方向に80cm検出した。幅は70～80cmで石を多く含んでいる。石の大きさは5～20cmであるが10～15cmが中心である。70個ほど確認できるが下に隠れている石もあり底には至っていない。北辺の雨落溝はほとんど石を検出していない。検出長は東西方向83cmで、幅83cm、深さ10～14cmで、底面標高は34.86～34.91mである。東辺は観自在王院西側の土塁脇で検出した。検出長は1.0m、検出幅は55cmである。西肩から緩く東側に下がり、底と思われる地点まで検出しているが、東肩は整備土塁の下にある。深さは5～8cmで、底面標高は34.86～34.88mである。底面に5～10cm程の石を14個確認した。

13-2の東側では石がまばらな状態である。本来は形のまま残っていたと思われるかわらけ一個分が、割れた状態で底に密着している。トレンチの箇所では断面を観察しているが、全体が整地層であるため、はっきりしたものではなかった。断面では雨落溝の底が僅かに沈む程度に窪んだ様子が看取されるが、浅いため埋土や雨落溝に含まれる石の圧痕の可能性もある。また南側では埋戻し土に侵食されている箇所もあり、雨落溝との境界が不明瞭であったが石の下5～10cmの層に砂を含んでいたことから、雨落溝の層位と判断した。標高は13-1より若干低い様子である。

13-3では土塁の西側に、雨落溝から続いていると思われる溝を検出した。8次調査では西側溝としている。南壁には逆台形状の断面を示すが、北側の断面では29層が溝状に窪んでいる。8次調査で西側溝を調査した際の痕跡と思われる。窪んでいる直下の30層あるいは32層までが粘土質で周辺の層位と異なることから溝の埋土の可能性もある。周辺は溝以前の掘り込み跡と思われるが南側の断面では検出しておらず、西側溝とは関係しないと思われる。南側の10層がブロックが入りやや似た層である。下記表の検出距離は、東西方向に調査した8次調査の幅である。溝幅は土塁側の肩を検出していないが1m程度の幅を持つと思われる。断面では溝底に石は検出していない。平面図には断面を元に位置を記入した。

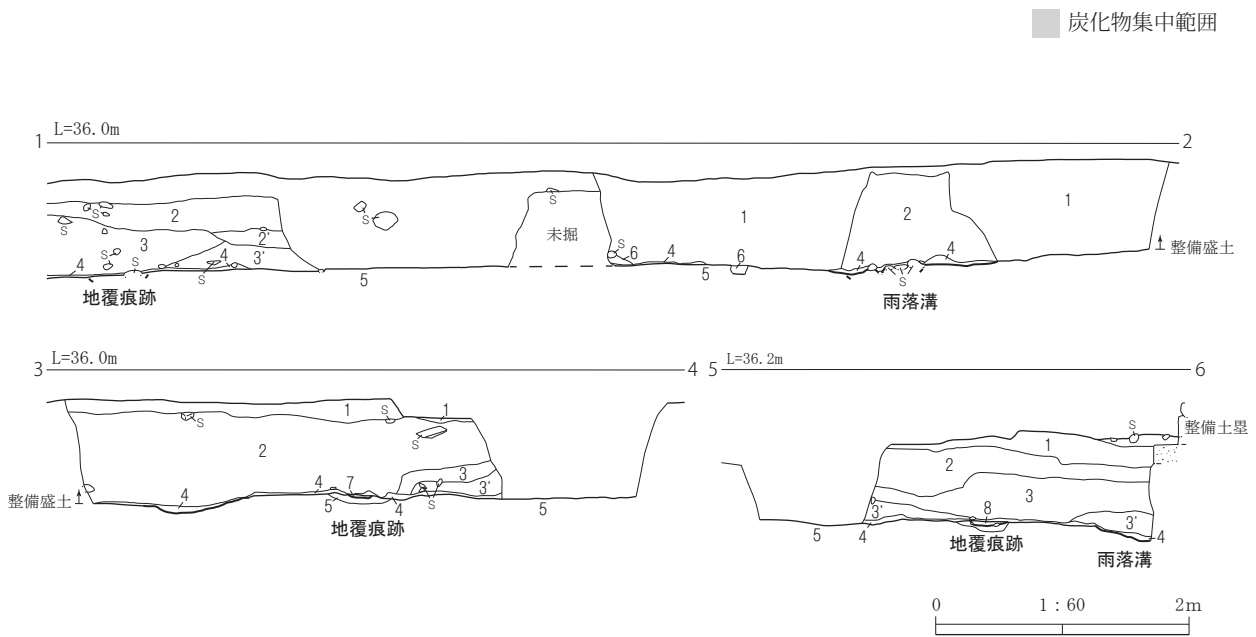
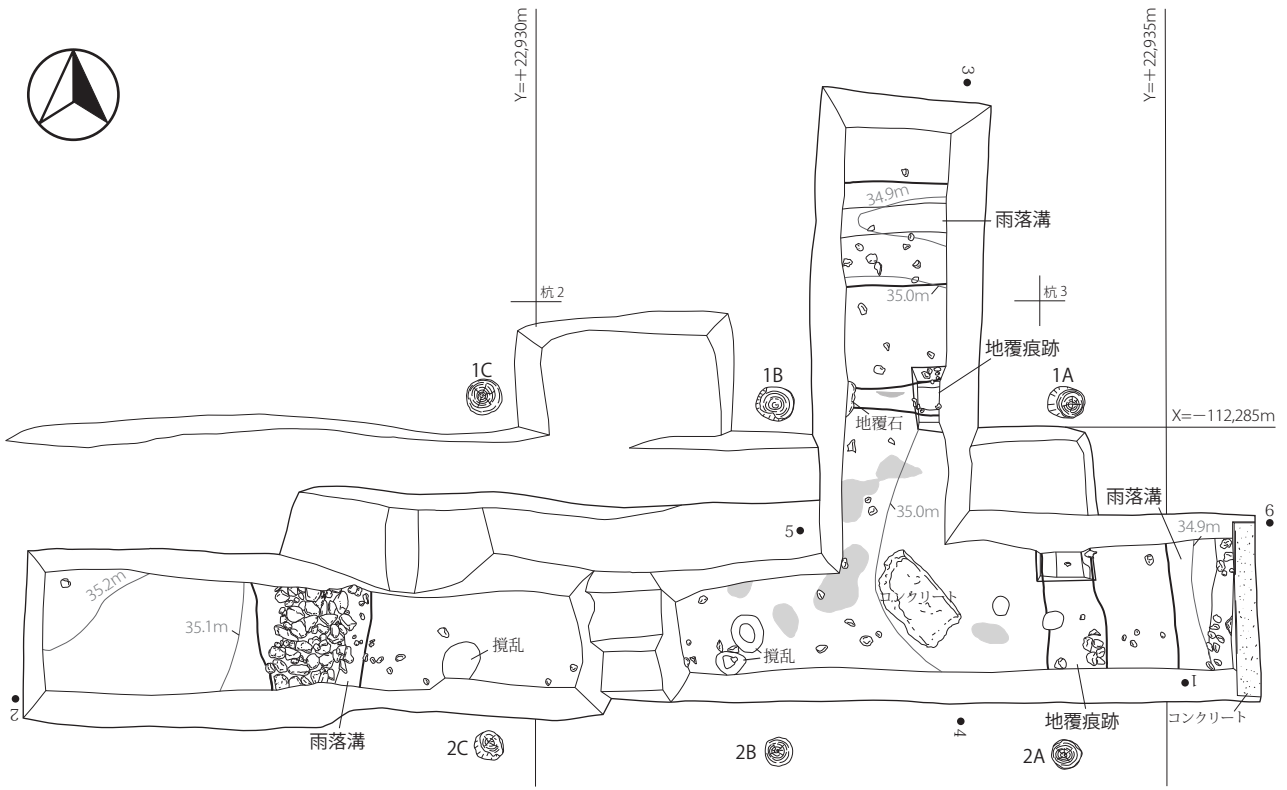
[ ] 残存値

遺構名	検出位置 検出状態	検出長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	方向	検出標高(m)	底面標高(m)
雨落溝	13-1 車宿北辺 断面形皿状	0.83	80～85	10～14	東西	34.94～35.01	34.86～34.91
雨落溝	13-1 車宿東辺 断面形皿状	1.05	[45～56]	5～12	南北	34.89～34.96	34.84～34.88
雨落溝	13-1 車宿西辺 石集積	0.83	72～95	[2～12]	南北	35.11	[34.97～35.01]
雨落溝	13-2 車宿西辺 南側に石検出	2.50	70～110	20	南北	34.90～35.00	34.80～34.90
西側溝	13-3 東端 断面検出	1.50	[90]	24	南北	34.76	34.52～34.58

## (3) 地覆痕跡

車宿の側面には壁を設けていたと推定されており、根拠となった地覆石と地覆石が設置されたと思われる痕跡を確認した。13-1の北辺と東辺で検出し、8次調査と同じ位置である。地覆石の単体の形や大きさまでは分からないが、周辺の整地層の色合いや質感が異なる黒褐色や灰黄褐色粘土の範囲である。北辺では東西距離が80cmで、幅15～18cmである。深さは東側にトレンチを設け確認したところ2～3cmであり、土壌の変色は圧痕程度である。西端に幅25cmの偏平な石を検出した。地覆石と思われるが、8次調査に「地覆」とあり、他にも「石が残されているところもあり」と記載されている。北辺の中央北寄りに粘土質の細長い痕跡が認められた。長さ20数cmの板状痕跡であるが、石が取れた後に含まれたものとも考えられ、地覆との関係は不明である。





1-2、3-4、5-6共通

- 1 10YR5/4にぶい黄褐シルト 10YR6/8明黄褐粘土、西側に2層の土混入 小礫多量、大礫少量含む(整備埋立)
- 2 5Y3/2オリーブ黒粘土 下位に5Y6/4オリーブ黄粘土、砂混入 小礫多量含む(昭和調査後の埋戻し土か)
- 2' 2層と3層の混合
- 3 2.5Y4/4オリーブ褐粘土 2.5Y5/6黄褐砂、5Y3/2オリーブ黒シルト混入 大小礫少量、草等含む
- 3' 5YR3/2オリーブ黒粘土 礫多量含む
- 4 5YR3/1オリーブ黒等の砂(昭和調査後の保護砂)
- 5 10Y7/1灰白粘土 10YR6/8明黄褐粘土、7.5Y4/3暗オリーブ砂混入(昭和調査未掘整地層)
- 6 5Y3/2オリーブ黒粘土(埋め砂の上下に入る埋土)
- 7 10YR4/2灰黄褐粘土 平面で10YR5/2灰黄褐粘土が筋状に入る部分は腐植した板のように見える 鉄分多量、炭化物少量含む(地覆痕跡)
- 8 2.5Y3/1黒褐粘土 鉄分含む(地覆痕跡)

第5図 13-1 調査区平面図・断面図

東辺では南北95cm、幅30～45cmで、深さは北壁際にトレンチを開けた箇所ではやはり3cm程度である。10cm大の石が数個南東側に集中している。

遺構名	検出箇所	検出長 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	方位	検出標高 (m)	その他
地覆痕跡	13-1 北辺	80	15～18	2～3	東西	34.98～35.03	地覆石検出
地覆痕跡	13-1 東辺	95	30～45	3	南北	34.96～35.00	小石数点検出

#### (4) 石敷

道路面の石敷は8次調査によると車宿周辺にはあまり残存せず、車宿南西は残りが良い様子である。13-1では表面に小石が多少残る程度であるが、西側雨落溝には集中し、東側雨落溝には数点散らばる程度である。13-2では、西側に5～12cm大の小石が散らばる様に検出した。水田耕作の影響を受けていると思われるが、13-3に比べると小さい事から、元々細かい石を用いた可能性もある。水田で平坦化されていると思われるが、検出面はトレンチ西端で標高35.2m、東に向かい残りの良い箇所では35.35m、中央では35.1m程度となり、石は検出していない。全体には東に向かい低くなっている。

13-3では範囲の東側が8次調査で「石の堆積範囲」として線引きされている。堆積という表現からは何層にも積まれている印象である。今回の調査では石敷とした。13-3西側は8次調査を行っていない範囲で、北側と中央、南側にトレンチを設けた。北側トレンチでは西端は整地層を掘り込んで耕作している様子が看取された。石敷の検出標高は35.12～35.34mで、西側が若干高くなっている。石の大きさは5～10cm程度が多い。中央トレンチは、東側は8次調査区と重複した箇所である。石の大きさは2～22cmを測り、5～10cmが主体を占め、整地層にしっかり固定された様子である。検出標高は35.17～35.32mで、東側に低くなっている。南側トレンチは東西方向で7.2m程調査した。東側と西側は削平を受け、石は残っていない。石の大きさは2～10cm大で、2～3cm大と7cm前後が主体を占め、中央トレンチと比べ細かい石で占められている。検出標高は東側で34.95m西側では35.33mである。石の検出状況に多少のばらつきがあるのは水田の畔や段差によるものと考えられるが、全体には水田耕作の際に混ぜられている。南側トレンチ北の深掘り箇所（断面27-28）では、西側では石敷が削平されており、断面は確認できなかった。東側では北壁断面21-22で1層下に石の並んだ状態が確認できる。検出標高は西側で35.02～35.20mで東側が低く、断面の東1/3には石が見られない。反対側の南壁断面では部分的に10～20cm大の石が見られる。

#### (5) 整地

調査箇所は全て整地されている。13-1調査区は検出のみのため周辺の整地の厚さは不明である。遺構は整地面上で検出した。一番高い箇所は車宿西側で、標高は35.24mである。最も低いのは東側雨落の底面で34.84mである。上面には炭を含む範囲が一部確認できる。また灰色の小穴状のプランが確認できるが埋戻土の影響の可能性もある。同様に窪みが散見するが土圧が原因と思われる。

13-2の東側は8次調査区を利用して整地や掘方などの断面を観察した。範囲は東西8.3m、幅は0.7～1.0m程度である。深さは、整備面から60cm程下に調査面があり、更に深掘りを0.9～1.3m行っている。底は（標高33.64m～34.02m）東側にやや下がり、調査面と思われるやや締まった面に達した。底は砂が主体で粘土ブロックの混じる状態を示し地山ではないと思われる。整地は層位状の堆積を示すが、版築のような堆積は見られない。石も含まれる土砂が混入している様子である。上層のみ粘土と砂の層位状の堆積があり、上面は砂にかわらけや炭を多く含む層となっている。

13-2西側の検出面は整地あるいは水田層である。西端が標高35.18mで上部は削平されている。石敷が良好に残っている箇所は整地面は35.3m程度で、東に下がっていて車宿の雨落溝西側では35.0m程度となっている。調査区西側の南側は、北に合わせ平坦にしているが、埋土や水田層が残された状況から1段低い水田があると考えられる。また、8次調査の端であり、地形等の都合で調査に含まれなかったと思われる。

13-3の整地層は西側で厚く、東側では浅い状態である。西側の8次調査箇所断面27-28では整地上面が標高35.3mで、下面は埋土を全て掘り下げてはいないが、34.4mまで確認をした。厚さは60~80cm程度で、明黄褐色や灰オリーブの明るめの色調を主体として、黒褐色や褐灰色が混入している。

東側の整地層は断面21-22では石敷を含む層あるいは石敷の下から検出(標高は35.13~34.96m)し、東に下がっている。東側で石敷を検出していないことから削平された可能性がある。整地の厚さは18~24cmである。灰黄色粘土ブロックを主体とする層が厚く、上の石敷との間にはにぶい黄褐色粘土層が堆積している。下は地山上に自然の流入と考えられる黒褐色(3層)があり、観自在王院以前に堆積した層と思われる。厚さは7~10cmで上層は整地層下面で(標高34.72~34.89m)あり、東に低くなっている。整地前の自然地形を表すと考えられ、13-1・2では検出してない。13-3西側では確認した整地層の底面が34.4mまでで、東側よりも低くなっている。

南側断面25-26では、北壁21-22の3層に対応する層は4層である。観自在王院の前後を分ける層として基準となる。上面(標高34.76~34.92m)には、整地層が堆積(南側トレンチ断面29-30の6層対応)する。厚さは10cm程度である。大きめの石を含む状態は前年(12次調査)検出の「根石状箇所」に似ている。今調査区南の平場にも石の集積する箇所があるが、全体に混じっている様相がある。8次調査報告にある、「石の集積範囲」という厚みを持たせる表現は、石敷とは異なる様子で、この整地層を指すものと考えられる。P2の断面11-12の1層が石を含む石敷の層で整地上に堆積する様子から、観自在王院に伴う石敷はこの整地の上にあったと思われる。

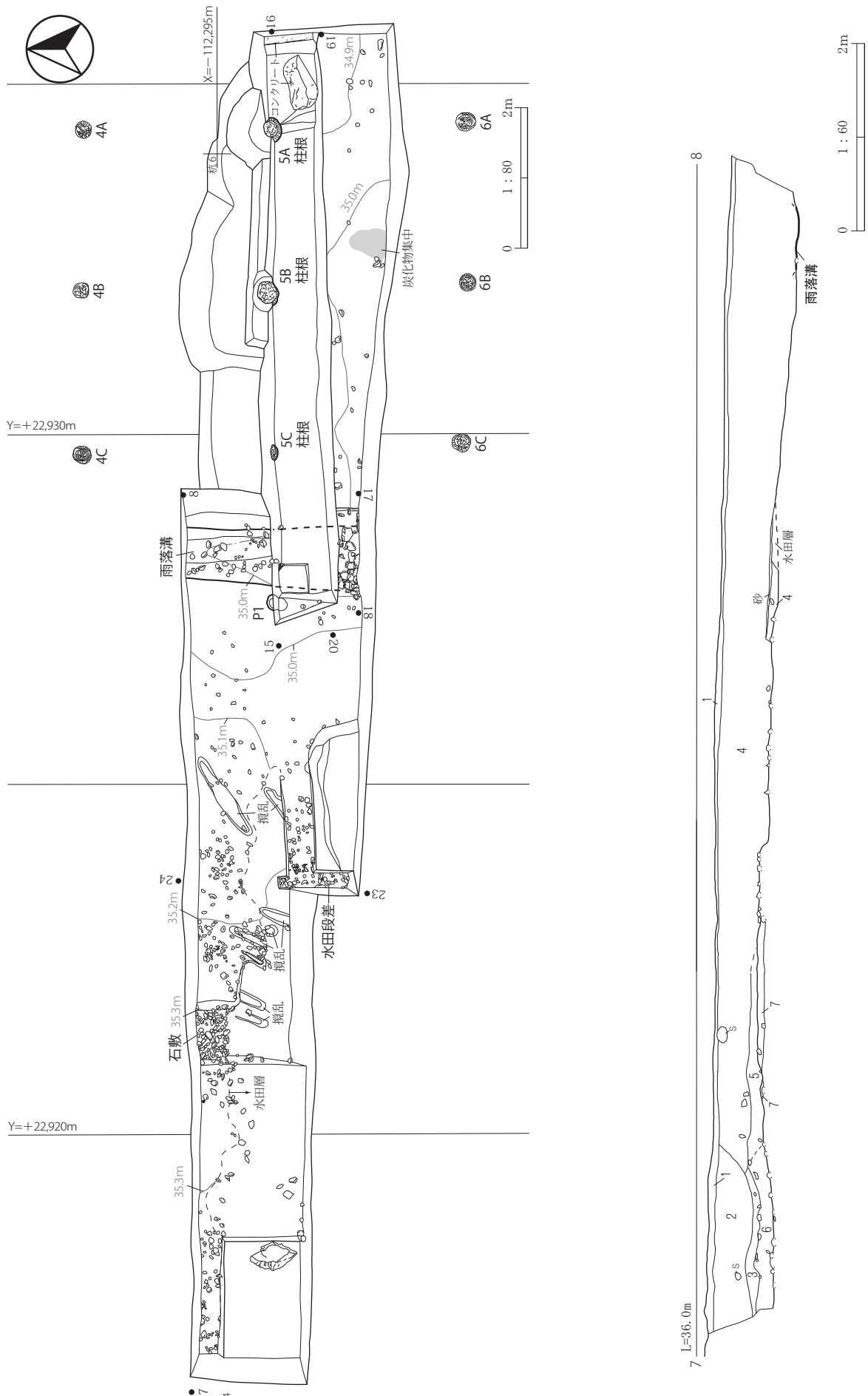
前年調査では「根石状箇所」の周辺は直上が整備の埋土であったため石敷は検出してない。薄い箇所もあるが観自在王院以前の堆積層も検出した。

## (6) その他の遺構

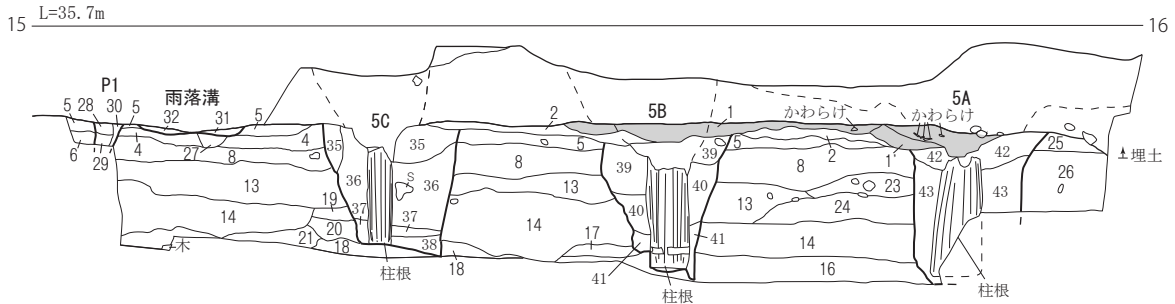
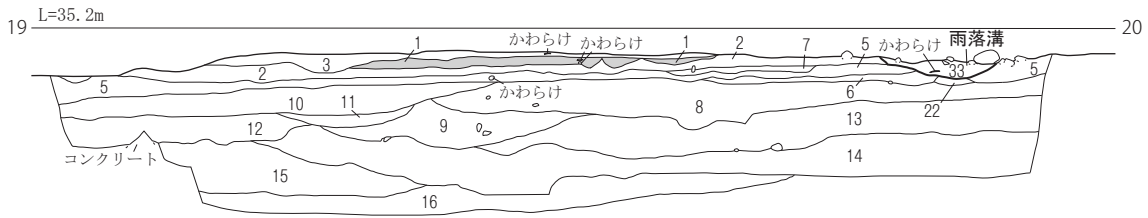
13-3の北壁断面21-22では中央が大きく落ち込み、東側にも溝状の断面が確認できる。しかし1.5m程離れている南側の断面には検出してないことから、土坑状の遺構か、溝であれば方向が南を向いていないと考えられる。中央の落ち込みは断面での規模は上部幅3.3m、深さ55cm程度(底面標高34.45m)である。遺構を掘り返している様子で底が数か所に認められる。埋土に石が混じり、層位は乱れている。観自在王院以前の3層と整地層を切っているが、石敷は上面にあることから、観自在王院の時期には埋められていたものと考えられる。

東側の落ち込みは検出幅95cm、深さは46cm(底面標高34.23m)である。レンズ状の堆積を見せ、埋土には石も含まれる。観自在王院の石敷よりも古く、上面は西側溝に切られていると考えられる。



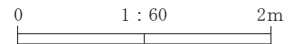
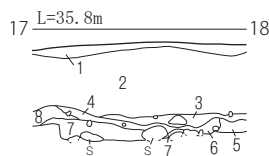
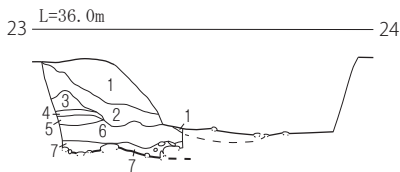


第6図 13-2 調査区平面図・断面図(1)



15-16、19-20共通

- 1 2.5Y4/1黄灰粘土 2.5Y6/6明黄褐砂混入 炭化物集中、かわらけ多量含む
- 1'1層とほぼ同 炭化物より多く含む
- 2 2.5Y6/6明黄褐砂 10YR6/8明黄褐粘土ブロック、10YR3/2黒褐粘土混入
- 3 2.5Y6/6明黄褐砂 5Y7/4浅黄粘土ブロック、10YR3/2黒褐粘土ブロック、所々に埋戻土混入
- 4 2.5Y7/2灰黄粘土
- 5 5Y7/3浅黄粘土 5Y5/1灰砂少量混入
- 6 5Y7/3浅黄粘土
- 7 10YR5/1褐灰砂
- 8 5Y7/4浅黄砂 5Y7/3浅黄粘土混入 小礫、鉄分含む
- 9 5Y7/2灰白粘土 10YR6/8明黄褐粘土、10Y2/2黒褐粘土ブロック混入 砂、小礫含む
- 10 10YR6/8明黄褐粘土 上位に5Y7/2灰白粘土混入 砂含む
- 11 10YR6/9明黄褐粘土 砂含む
- 12 10YR6/8明黄褐粘土 5Y7/2灰白粘土ブロック、10YR3/2黒褐粘土ブロック、10YR5/6黄褐砂混入
- 13 10YR4/2灰黄シルトブロック 10YR4/2灰黄褐砂ブロック、10YR2/2黒褐粘土ブロック、2.5Y7/4浅黄砂～粘土混入
- 14 5Y7/3浅黄シルト 5Y7/3浅黄砂、10YR5/6黄褐砂～シルト、10YR3/2黒褐シルトブロック混入
- 15 2.5Y7/6明黄褐粘土 10YR5/6黄褐粘土ブロック、10YR3/2黒褐粘土ブロック混入
- 16 10Y4/2オリブ灰砂 2.5Y4/1黄灰粘土ブロック混入 小礫含む
- 17 2.5Y7/1灰白粘土 2.5Y4/1黄灰粘土ブロック混入
- 18 7.5YR6/8橙粘土 5Y7/3浅黄、7.5YR3/2黒褐粘土混入 鉄分含む
- 19 2.5Y7/3浅黄砂(14層中のブロックか)
- 20 10YR5/6黄褐砂 2.5Y7/6明黄褐粘土、10YR3/2黒褐粘土ブロック混入 鉄分多量含む
- 21 7.5YR6/8橙シルト
- 22 5Y7/2灰白粘土 炭化物含む
- 23 2.5Y7/3浅黄粘土 10YR4/2灰黄褐粘土混入
- 24 5Y7/4浅黄粘土 5Y4/1灰粘土少量混入
- 25 2.5Y7/3浅黄粘土 5Y6/1灰砂混入
- 26 5Y7/4浅黄粘土 10YR4/1褐灰粘土ブロック、2.5Y5/1黄灰砂混入
- 27 10YR6/6明黄褐砂 2.5Y4/2暗灰黄粘土ブロック混入 礫含む(攪乱)
- P1 29 5Y6/2灰オリブ粘土 砂、鉄分含む
- 30 5Y6/2灰オリブ粘土 砂少量、炭化物少量含む
- 31 5Y7/2灰白粘土 砂含む
- 雨落溝 32 2.5Y5/4黄褐粘土 砂、鉄分含む
- 33 2.5Y6/6明黄褐粘土
- 34 2.5Y6/3にぶい黄砂 かわらけ含む
- 5C 35 10YR5/6黄褐砂 10YR5/6黄褐粘土ブロック、5Y7/2灰白粘土ブロック混入
- 36 10YR5/3にぶい黄褐粘土 2.5Y5/6黄褐砂ブロック、10YR2/3黒褐粘土ブロック、5Y7/4浅黄粘土ブロック混入
- 37 10YR5/6黄褐砂 2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック、10YR3/2黒褐粘土ブロック少量混入 鉄分多量含む 固い
- 38 10YR5/6黄褐砂 2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック、10YR3/2黒褐粘土ブロック混入 鉄分多量含む 固い
- 5B 39 5Y7/2灰白粘土 10YR6/1褐灰砂混入
- 40 10YR5/6黄褐砂 5Y7/2灰白粘土ブロック混入 小礫含む
- 41 2.5Y7/6明黄褐粘土 一部に10YR3/2黒褐粘土ブロック混入
- 5A 42 2.5Y7/4浅黄粘土 10YR5/6黄褐砂混入
- 43 5Y7/2灰白粘土 10YR5/6黄褐砂、10YR5/2灰黄褐～2.5Y6/1黄灰粘土ブロック混入



7-8

- 1 2.5Y4/2暗灰黄シルト 鉄分多量、小礫含む(整備埋立)
- 2 2.5Y4/2暗灰黄粘土 10YR4/4褐粘土ブロック混入 小礫含む
- 3 2.5Y3/4暗褐シルト 2.5Y5/6黄褐砂、2.5Y5/6黄褐粘土ブロック混入 小礫含む
- 4 2.5Y4/2暗灰黄粘土 10YR5/6黄褐粘土ブロック、黄粘土ブロック混入 礫含む 西側は下面に保護砂(整備埋立)
- 5 10YR5/6黄褐粘土ブロック 2.5Y4/2暗灰黄シルトブロック混入 (昭和調査後の埋戻土)
- 6 5Y6/2灰オリブ粘土 2.5Y3/2黒褐砂、2.5Y3/2黒褐シルト混入 小礫含む 5層と似るがブロック大きい
- 7 10YR4/4褐砂 2.5Y7/4浅黄粘土ブロック、底面に2.5Y5/6黄褐粘土、2.5Y6/2灰黄砂、5Y7/2灰白粘土混入 砂多量、小礫、鉄分含む(12Cの造成土)

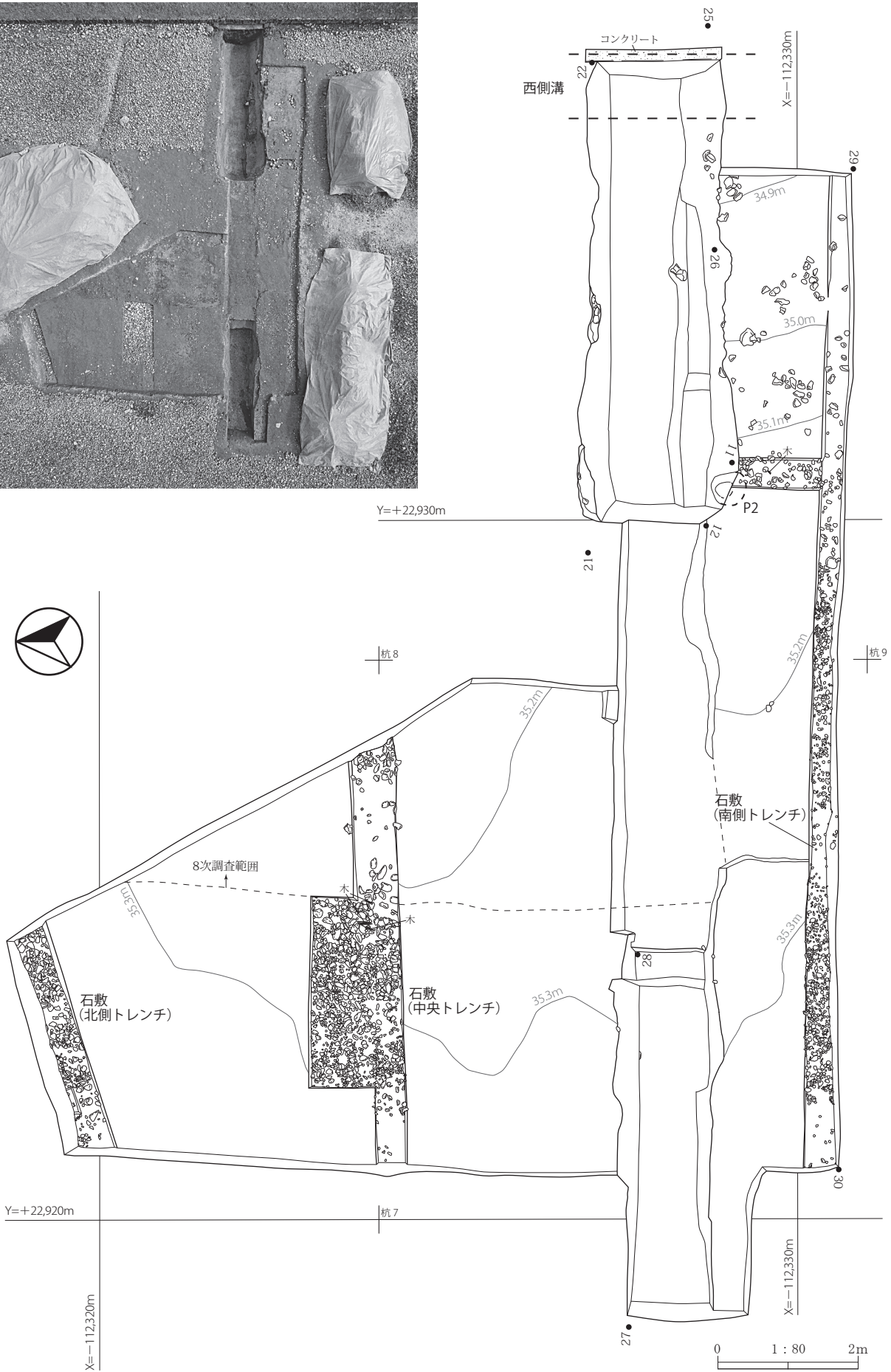
23-24

- 1 2.5Y5/3黄褐粘土 2層の土混入 砂含む
- 2 2.5Y4/2暗灰黄シルト 礫含む(整備埋立)
- 3 10YR3/2黒褐シルト(水田か旧表土)
- 4 2.5Y5/4黄褐砂 鉄分集中(水田下床)
- 5 2.5Y4/4オリブ褐粘土 鉄分含む
- 6 2.5Y4/3オリブ褐粘土 水分含む
- 7 2.5Y5/3黄褐砂 2.5Y5/3粘土混入

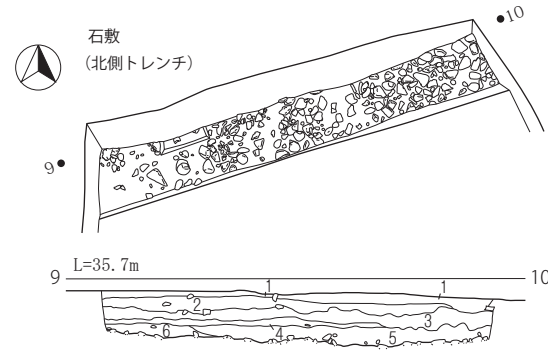
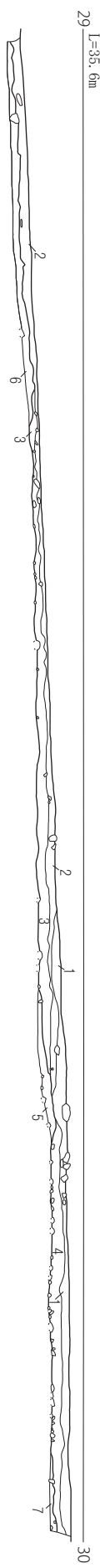
17-18

- 1 2.5Y4/2暗灰黄シルト 鉄分、小礫含む
- 2 2.5Y4/2暗灰黄シルト 2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック混入 礫含む
- 3 2.5Y6/6明黄褐砂 2.5Y3/2黒褐粘土ブロック混入
- 4 2.5Y7/4浅黄粘土ブロック 2.5Y5/3黄褐砂混入 炭化物含む(整備埋立)
- 5 10YR4/2灰黄褐粘土ブロック
- 6 2.5Y7/3浅黄粘土
- 7 2.5Y7/4浅黄粘土 2.5Y5/3黄褐砂混入
- 8 2.5Y7/2灰黄粘土 10YR6/6明黄褐砂混入

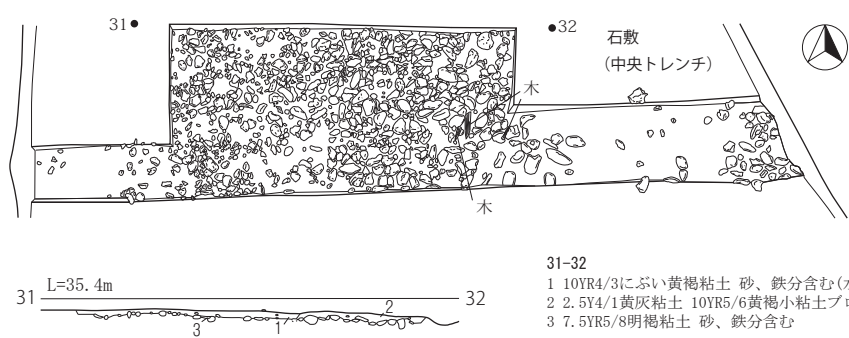
第7図 13-2 調査区断面図(2)



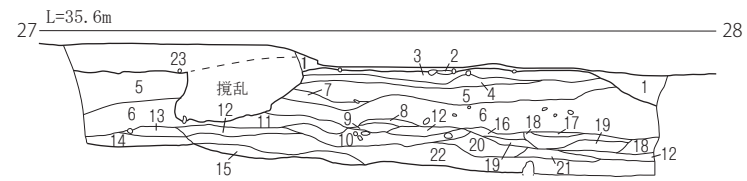
第8図 13-3 調査区平面図



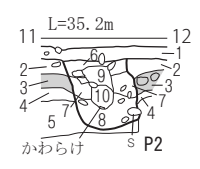
- 9-10
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐砂 2.5Y4/3オリーブ褐粘土ブロック混入 下位に鉄分集中
  - 2 2.5Y4/2暗灰黄シルト 小礫、砂含む
  - 3 2.5Y3/1黒褐粘土 砂、鉄分含む
  - 4 2.5Y3/2黒褐シルト 砂多量、炭化物少量含む
  - 5 2.5Y4/2暗灰黄粘土 鉄分含む 3層に似る(耕作土)
  - 6 2.5Y4/2暗灰黄粘土 10YR4/6褐粘土ブロック混入 上位は3層に似る



- 31-32
- 1 10YR4/3にぶい黄褐粘土 砂、鉄分含む(水田)
  - 2 2.5Y4/1黄灰粘土 10YR5/6黄褐小粘土ブロック混入 鉄分集中(水田)
  - 3 7.5YR5/8明褐粘土 砂、鉄分含む

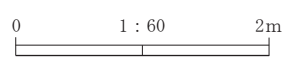


- 27-28
- 1 5Y4/1灰粘土〜シルト 砂、鉄分含む
  - 2 10YR4/6褐粘土(鉄分集積層)
  - 3 2.5Y6/2暗灰黄シルト 10YR5/6黄褐粘土、2.5Y4/2暗灰黄シルトブロック混入 砂含む
  - 4 10YR5/6黄褐粘土 2.5Y7/3浅黄粘土、10YR4/6褐粘土ブロック混入 砂含む
  - 5 5Y6/3オリーブ黄粘土 2.5Y6/3にぶい黄粘土〜砂混入 小礫含む
  - 6 10YR6/6明黄褐粘土 5Y6/2灰オリーブ粘土ブロック、5Y6/2灰オリーブ砂混入 小礫、鉄分含む
  - 7 10YR6/6明黄褐粘土 5Y6/2灰オリーブ粘土ブロック、5Y6/2灰オリーブ砂、10YR4/2灰黄褐砂混入 小礫、鉄分含む
  - 8 2.5Y5/3黄褐砂 2.5Y6/4にぶい黄粘土、筋状に10YR3/2黒褐粘土混入
  - 9 2.5Y5/4黄褐粘土 2.5Y6/3にぶい黄砂混入
  - 10 10YR3/2黒褐粘土ブロック 2.5Y5/3黄褐砂ブロック混入 小礫含む
  - 11 2.5Y5/4黄褐シルト 2.5Y5/4黄褐砂、10YR4/2灰黄褐砂ブロック混入
  - 12 10YR3/1黒褐シルト 5Y5/2灰オリーブ砂ブロック、5Y6/4オリーブ黄粘土ブロック混入
  - 13 10YR5/4にぶい黄褐粘土 5Y4/3オリーブ褐粘土混入 鉄分含む
  - 14 2.5Y4/2暗灰黄粘土 10YR6/8明黄褐粘土ブロック混入
  - 15 10YR4/3にぶい黄褐粘土ブロック 5Y7/2灰白シルトブロック、10YR4/1褐粘土ブロック混入
  - 16 2.5Y5/2暗灰黄砂 2.5Y6/4にぶい黄粘土ブロック、2.5Y5/4黄褐粘土ブロック混入
  - 17 2.5Y6/4にぶい黄粘土 2.5Y4/1黄灰シルト〜砂混入
  - 18 2.5Y5/4黄褐粘土 2.5Y5/4黄褐砂、2.5Y4/2暗灰黄粘土ブロック、10YR2/1黒粘土ブロック混入
  - 19 2.5Y4/4オリーブ褐粘土ブロック 2.5Y4/4オリーブ褐砂混入 小礫含む
  - 20 2.5Y7/2灰黄砂 10YR6/2灰黄褐シルト〜粘土ブロック、2.5Y7/4浅黄砂混入 小礫含む
  - 21 2.5Y5/4黄褐粘土 2.5Y5/3黄褐砂混入
  - 22 2.5Y5/3黄褐砂 2.5Y4/1黄灰砂、2.5Y6/2灰黄粘土ブロック、2.5Y6/6明黄褐粘土混入
  - 23 10YR3/2黒褐シルト 5Y4/1灰粘土混入 礫含む(表土)



- 11-12
- 1 10YR5/3にぶい黄褐粘土 2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック少量、砂混入 鉄分含む
  - 2 10YR5/2灰黄褐粘土〜砂ブロック 2.5Y7/2灰黄粘土ブロック、2.5Y3/2黒褐シルトブロック混入 炭化物少量含む
  - 3 10YR3/2黒褐粘土 2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック少量混入 砂、鉄分少量、炭化物含む
  - 4 2.5Y6/3にぶい黄粘土 2.5Y6/2灰黄シルトブロック混入 鉄分含む
  - 5 2.5Y6/4にぶい黄粘土(地山)
  - P2 6 2.5Y5/1黄灰シルト 2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック少量混入 かわらけ、小礫、炭化物含む
  - 7 2.5Y7/6明黄褐粘土 10YR5/2灰黄褐シルト混入
  - 8 2.5Y6/6明黄褐粘土ブロック 2.5Y2/1黒粘土ブロック、10YR5/2灰黄褐砂ブロック混入 5〜10cm大の礫含む
  - 9 10YR5/2灰黄褐砂ブロック 2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック混入
  - 10 10YR5/2灰黄褐粘土 2.5Y7/6明黄褐粘土ブロック少量混入 鉄分、炭化物少量含む

- 29-30
- 1 10YR3/3暗褐シルト 10YR6/2灰黄褐砂混入 礫含む(整備盛土)
  - 2 10YR5/4にぶい黄褐粘土 砂、礫含む(整備盛土)
  - 3 2.5Y5/2暗灰黄粘土 鉄分、炭化物少量含む(水田)
  - 4 10YR3/2黒褐シルト 粘性やや強(水田)
  - 5 2.5Y4/1黄灰粘土 7.5YR5/6明褐粘土ブロック混入 鉄分、炭化物少量含む(整地)
  - 6 2.5Y7/4浅黄粘土 2.5Y5/1黄灰粘土、7.5YR5/8明褐粘土混入 炭化物少量含む(整地)
  - 7 2.5Y5/4黄褐粘土 10YR4/6褐砂混入(整地)



第9図 13-3 調査区断面図(1)

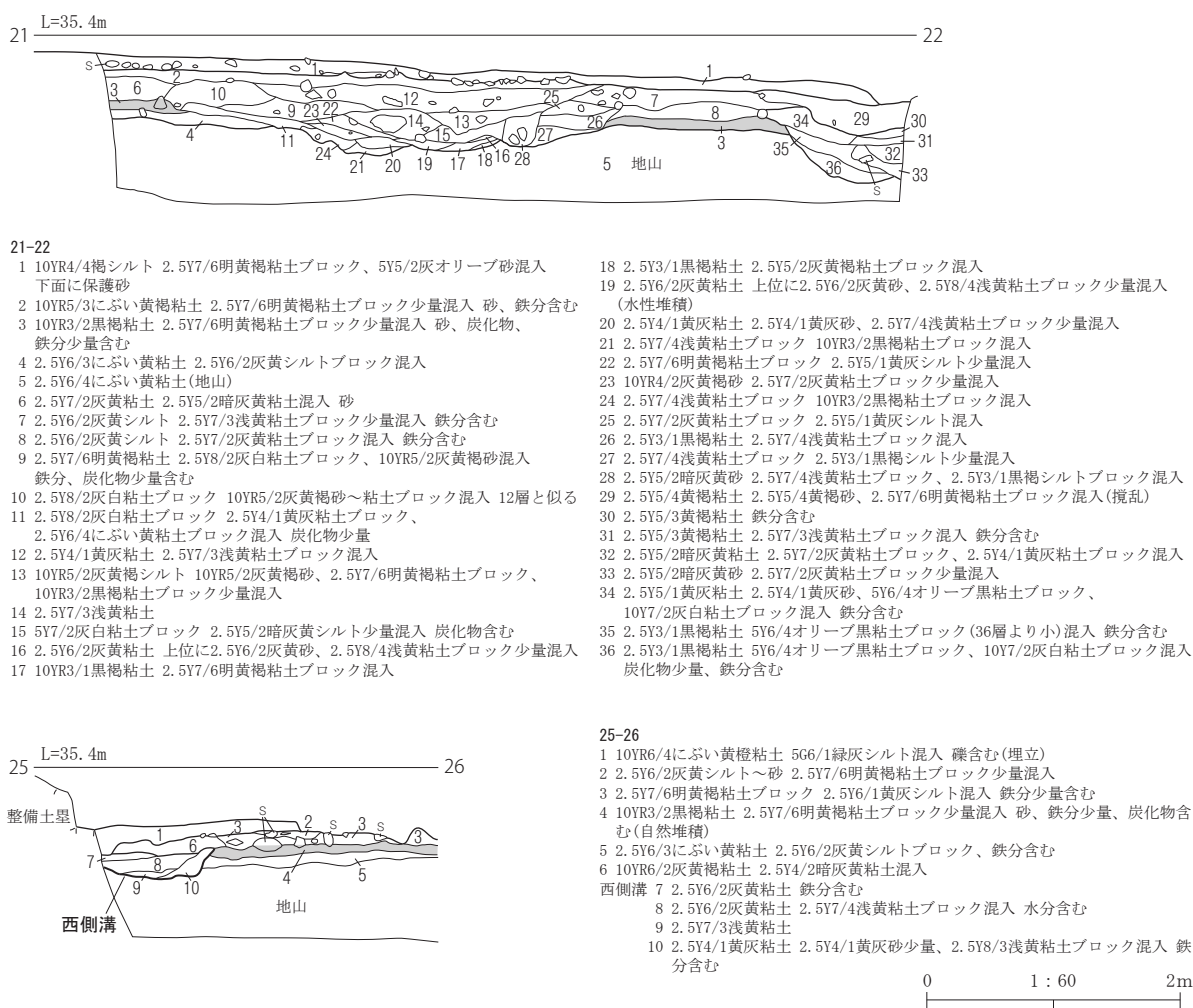


### 3 出土遺物

かわらけはコンテナ1箱程度出土した。8次調査後に埋戻した土砂を掘削し調査しているため、小片が多く接合が難しい。また同じ理由により現代の磁器やガラスなども混じって出土している。陶器は1点出土したが、かわらけと同様に埋戻層からの出土である。土師器は坏の体部と思われる1点が盛土層からの出土で小片である。もう1点は水田層からの出土で細片である。不明土製品は4点出土している。大きさは1cm大で土壁の可能性もある。埋戻し層からの出土である。土壁の1点は2cm程度の大きさで、13-3の水田層に近い石敷検出時に出土した。現代とすぐに判断できるもの以外の鉄製品や鉄滓も埋戻し層からの出土で、特記するところはない。

柱根は3箇所検出した。最長1.1m、幅36cmである。腐植している様子がなく良好な検出状態である。5B下側に、ほぞ穴状の箇所が横に2つ並んで加工されている。一つの大きさは縦5×横18cm程度で横方向に長い。通じてはいない様子であるが、土を取り除くのに限界があった。確認しているのは5Bだけであるが他の柱根に関しては調査の反対側にある可能性もある。筏で運ぶための穴である可能性がある。材質については昭和の報告で桧とされているが今回5B柱根上部の破損部を回収し樹種同定を依頼したところ、材質はクリであることが分かった。

柱根は3箇所共取り上げせずに砂で保護した上で埋め戻している。



第10図 13-3 調査区断面図(2)

## IV まとめ

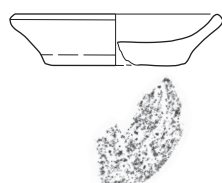
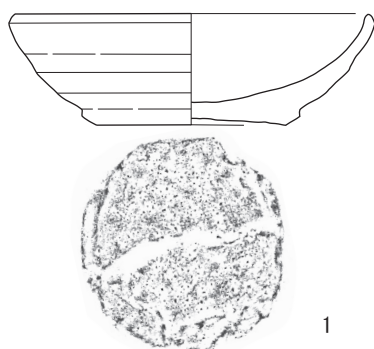
車宿について8次調査では、「柱を立てた後に約30cmほど盛土整地し、上面は小砂利を撒いてため、一部では小砂利とともに土器片も骨材として利用していた。」と報告している。断ち割りトレンチの再確認であったが、平面からは小砂利はさほど混じっている様子は窺えなかった。断面では1層が前述の上面に相当すると思われ、かわらけと炭を多く混入しているが、小砂利の下層に相当するかは不明である。掘方の上に被せており、柱を建てた後で堆積していることは確かだが、5Aでは柱根の上に迫って覆うかのような状態から、車宿廃絶後に整地されたようにも解釈できる。ただし、8次調査において柱根上面を掘削されており、柱根と1層の関係が確認できないため、解釈が難しい。また、周辺の土がなだれ込む場合も想定される。

地覆痕跡については8次調査結果に地覆石の圧痕と想定しているが、今回の調査状態から、壁を伝った雨水などの痕という可能性も考えられる。

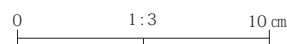
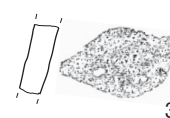
石敷は13-1と2は攪乱のためか残りの状態が良好とはいえない。13-3では遺構検出面まで浅いものの石敷の状態が良く残されていた。南側トレンチは中央トレンチに比べて小さい石で構成されている違いがある。むしろ小さい石は、前年(12次)調査で検出した状態と類似している。12次調査区は今回の調査区の南約15m程度の距離であるが、石敷は続いていると考えられる。

13-3東に検出している西側溝は、北側の車宿雨落溝につながる。南延長上には11次調査5号溝が検出しており、規模が異なるものの、同じ溝の続きである可能性がある。溝底の標高は、北側に位置する13-3西側溝(34.52m)の方が、南の11SD5(34.36m以下)より高い。また、規模も11SD5(幅3m程度)の方が大きく、南へ排水していた可能性がある。

かわらけ



国産陶器



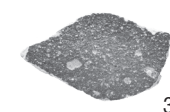
第2表 かわらけ観察表

( ) 推定値

No.	出土位置・層位	種類	法量(cm)			残存率(%)	年代	備考	登録No.
			口径	底径	器高				
1	13-3 東端 8次調査 埋戻層	ロクロ大	(14.5)	8.6	4.4	80	12 c	反転実測 摩滅	82-1.84-5
2	13-2 断面 19-20 1層	ロクロ小	(8.4)	(5.5)	2.0	40	12 c	反転実測	87-2

第3表 国産陶器観察表

No.	出土位置・層位	種類	器種	部位	年代	備考	登録No.
3	13-3 東端 8次調査 埋戻層	常滑	甕	胴部	12 c		84-2



第11図 出土遺物





13-2 調査区 (南から)



13-3 調査区 (南から)



# 写真図版







車宿 (13-2 : 南から)





13-1 全景 (南から)



1A・2A間 (北から)



1A・2A間 (南から)



1A・1B間 (東から)



西辺雨落溝 (南から)





断面 15-16 (南東から)



断面 19-20 (北東から)



P 1 (南から)



5 C (南から)



雨落溝 (北から)



雨落溝 (南から)

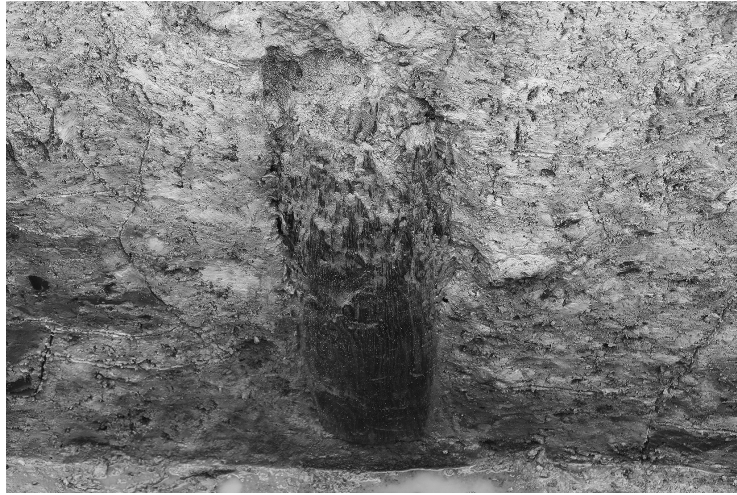


西側の状態 (南東から)



水田段差 (東から)





5C



5B



5A



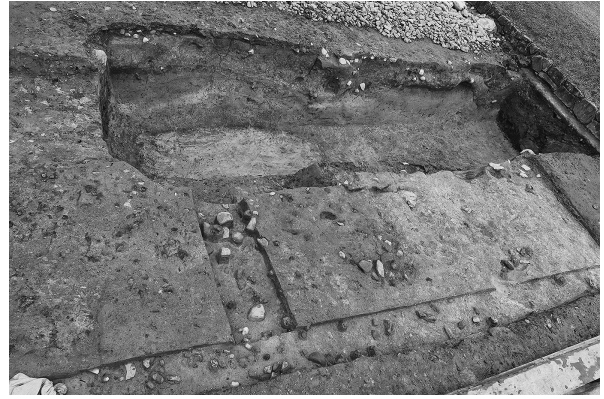
5B

写真図版4 車宿柱根





13-3 西側（南から）



13-3 西側（南西から）



北側トレンチ（南西から）



断面 21-22 東側（南から）



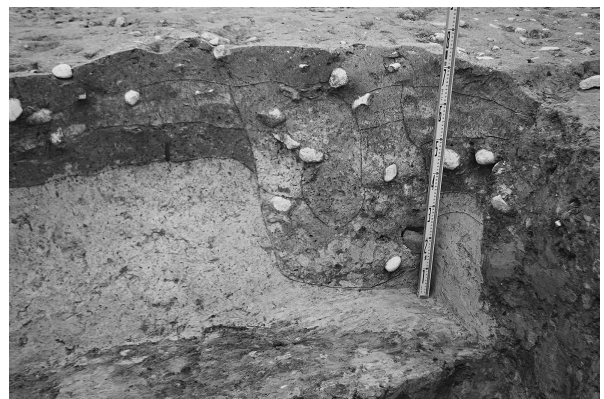
中央トレンチ（北から）



土塁西側溝（北から）



南側トレンチ（北西から）



P 2（北東から）

写真図版 5 13-3 調査区



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	めいしょうきゅうかんじざいおういんていえんはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅳ							
副書名	第13次調査							
巻名								
シリーズ名	岩手県平泉町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第145集							
編集者名	島原弘征 鈴木江利子							
編集機関	平泉町教育委員会							
所在地	〒029-4102 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山45番地2 電話(0191)46-2111(代)							
発行年月日	西暦2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かんじざいおういんあと 観自在王院跡	いわてけん にしいわいくん 岩手県西磐井郡  ひらいずみちょう 平泉町  ひらいずみあざしらやま 平泉字志羅山地内	03402	NE76-1052	38° 59' 17"	141° 06' 34"	20190902~1118	170㎡	史跡整備 を目的と した内容 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
観自在王院跡	寺院	12世紀	車宿 道路跡（石敷） 溝跡 柱穴 土塁 整地層	かわらけ 国産陶器 土師器 土壁				
要約	<p>観自在王院跡南西側を対象とした内容確認調査の報告である。</p> <p>調査の結果、車宿、溝跡、石敷道路、柱穴を確認した。</p> <p>車宿は昭和52年の調査で確認されており、東西4.6m（2間）、南北方向27.5m（10間）を測る。13次調査では北から5番目の柱（S68.1ライン）の調査を行い、柱の状況を確認した。車宿の柱は径30cmと太く、残存状況は良好で柱の通りも良いことを確認した。周囲に雨落溝が巡り完結していることや、『吾妻鏡』の記載から車宿と考えられる遺構である。なお、柱の樹種は、自然科学分析の結果クリと同定された。</p>							

岩手県平泉町文化財調査報告書第145集

## 名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅳ

— 第13次調査 —

印刷 令和5年3月29日

発行 令和5年3月31日

編集・発行 平泉町教育委員会

〒029-4102 岩手県西磐井郡平泉町平泉字志羅山45番地2

電話 (0191) 46-2111 (代) FAX (0191) 46-2015

印刷 川嶋印刷株式会社

〒029-4194 岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

電話 (0191) 46-4161